
バレンタイン・キッス！

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレンタイン・キッス！

【Nコード】

N4486J

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

秋野なつみはお誕生日が元旦。全国の人に祝ってもらえるって？
とんでもない話よ。

プロローグ

プロローグ

私は秋野なつみ。元旦生まれなのになつみってどうよ。まあいいけど。

新年が明けたからといって何にも変わりはない。

私の誕生日が過ぎただけ。正月生まれのどこがいいの。みんなが冬休みの間に一人さびしく誕生日。しかも元旦なんて誰も遊んでくれないし、みんな都会から消えるように故郷とやらへ帰って行く。私はみんなにプレゼントも送ってきたのに、自分の時はメールだけ。新学期にみんなで祝おうって言うってくれるけどそれって新年会と同じ。ものすごい不公平。

こんなときに産んでくれて本当にありがとう。もうパパも再婚したしママは五年前に死んじゃった。私はひっそり十五歳。今日はなぜか出張でパパはいないし、新ママは悪阻で里に帰ってる。プレゼントは届いたけど、すごくさびしいバースデー。

そんな時にケータイが鳴った。今野優

「オッス、元気？」

「ああ、優ちゃん」

「今日は誕生日だって？」

「どうして知ってるの？」

「妹から聞いた」

優ちゃんの妹と同じ書道教室に通ってるの。可愛い後輩なの。ミミちゃんっていうけど、本当は美紀ちゃん。小さい時に自分でミミちゃんって覚えたらしくて、それ以来みんなミミちゃんって呼ばれてるの。優ちゃんとは幼稚園からの幼馴染。今は隣のクラスだけど、時々ゲームぐらいやってる。優ちゃんは書道なんて縁がなく、ひた

すら走ってばかり。将来は箱根駅伝に出るって頑張ってる。うちの学校は中学駅伝の常勝校。今年も三位に入った。もう三年だからクラブは終わったのに、走ることは続けてないといけないって今も休まずランニングの毎日。体脂肪も五パーセントだって。死んじゃうし。

そんな優ちゃんだけど、今日は覚えていてくれたんだ。だって妹とは暮れから会ってないもん。

「今から出てこない？」

「何処へ？」

「なつみの家の前」

「うっそー」

バタバタと玄関を開けると、優ちゃんが立ってる。手にはホカホカの焼き芋。

「おう、おめでとう」

「ありがとうっていうか、焼き芋？」

嬉しいけど、複雑な気分。女に焼き芋か。

「これが一番なの。寒い冬にはこれだろ」

誰もいないけど、いつも優ちゃんは特別。どうぞどうぞと中へ入れる。

「おじさんは？」

「娘の誕生日に出張よ」

「そうか、お婆さんは？」

「つわりがひどくて、お婆あちゃんのところへ」

「お前はどこまでも不幸だなあ」

そう言われても仕方がないくらい、不幸な気持ち。

それでも、優ちゃんはほくほくのお芋を持ってきてくれたから心があったかくなる。考えると三歳からずっと祝ってもらってる。

「おいしいわ。これいつものところ？」

「おお、勿論。俺は浮気はせん」

オーバーに言いながらも優ちゃんの優しい気持ちが伝わってくる。

恋人にはならないけど、優ちゃんは好き。友達として最高。何も隠さず話せるし、私の悩みも聞いてくれる。

第一章

「ねえ、今日は優ちゃんのところは何してるの？」

「ああ、お袋が朝からおせちをパックから重箱に移していた。妹は着物を着せろって泣いてる。親父は朝からウイスキー飲んでべろ」

「はーっ、楽しそう！」

「そんなね、楽しいわけじゃないじゃん。うるさいだけ」

「いいわあ、そんなの懂れる」

「これ食べたら、行こうよ、初詣」

「うん、行く行く。ちよっと待ってて」

二階の部屋でお着替え。こんなことなら新しいセーターでも買っておけばよかった。そうだ、新ママのバスデープレゼントがあったんだ。中からは好きなメーカーの可愛いスカート。フリル付きのチェック。これとセーターとダウンを着て、バッグはこれだ。月刊誌の付録。これ目当てに買ったの。後はロングブーツ。ばっちり。

「お待たせ」

「おう、いいじゃん。馬子にも衣装だね」

「失礼ね。でも、ありがとう」

「合格祈願だからな、ちよっと絵馬なんかも買っちゃおうかな」

「そうだね」

私たちはいそいそと近所の天満宮へ。いいなあ、着物の人がいる。私も着たいなあ。

「おーい、なっちゃん」

振り向くと、うちのクラスのゲンちゃん。時代にそぐわない名前だったというけど、彼の四角い顔にはぴったりだわ。

「おう、木村玄児君、何だね、その長いマフラーは」

「いやあ、わかった？ 手編みのマフラー」

「まっちゃんに編んでもらったの？」

「そう、彼女のお手製」

「ビュービューだね」

「お前たちもデート？」

「違う、初詣」

でも、そう言われても嫌な感じはない。優ちゃんは違うっていったけど、そりゃあデートじゃないわねえ。まっちゃんは鳥居の下で待っていた。可愛い着物姿。黄八丈の赤い着物が似合ってる。

「よー、いいねえ。大和撫子みたいじゃないか。町村真子って何でこんなに可愛いんだろう」

「おまえ、褒めすぎ！」

「でも、まっちゃん可愛い。羨ましいなあ」

着物には負ける。やっぱり、お正月は着たいなあ。

「あけましておめでどう」

町村真子は隣のクラスの美人学級委員長。何でゲンちゃんなのか、みんな不思議に思ったけど、ゲンちゃんは優しいもんね。それにクラスの盛り上げ役。苦労人らしいけど、そこもいいのかも。

優ちゃんは改めて、二人に言った。

「あけましてもうさだけど、今日はなつみの誕生日」

「うわー、そうだった。ごめん。お誕生日おめでどう」

「すまんすまん。ハッピーバースデートゥユー」

「いいのよ。ありがとう」

「よくないよくない。今日はこれから初詣の後、どこ行くの？」

そこで、みんなが初詣の後、一時間後になつみの家に集合になった。つまり、誕生日会をしてくれるって。こんなこと、初めて。驚きながらも、さっさと進めてくれる優ちゃんに感謝の気持ちかわいてくる。

天満宮の人込みは、この初詣で一年の収入全部だろうというほどすごかった。

「こっちこっち」

と言いながら手を引っ張ってくれる優ちゃん。頼もしく思えてきた。去年までは私より小さかったのに、夏休みぐらいからぐんぐん伸びて、今は頭一つ分追い越された。私の身長はピタッと止まってしまった。後は横に太るだけってパパが言うけど。嫌な感じ。

まっちゃんとゲンちゃんは二人で仲良く並んでいってる。もちろん手をつないで。でも着物の帯が引っかかって、まっちゃんはハラハラしてるみたい。着なれないから大変そう。長い振袖もいいけど、まっちゃんのような着物はとにかく普段着っぽいのに日本的でいいなあ。

やっと賽銭箱の前に着くと、二人で鐘を鳴らして、百円を入れて必勝合格祈願。私は聖蘭女学院。優ちゃんは陸上の強い鹿賀高。絵馬も買った。ゲンちゃんたちは同じところに行くつもりらしい。私は昔から憧れの制服の女子高。はあ、もう今月が受験。無事受かってほしいなあ。

「じゃあ、今から一時間後になつみの家だぜ」

「わかった」

「なつみ、食べ物全部俺たちが持っていくから。食器だけ貸して」

「いいの？ それだけで」

「勿論。それぐらいやるから待っててね」

私は走って帰って部屋の掃除を始めた。昨日言っただけだった、はあ大変だけど、嬉しい。ベッドの周りに散らかっていた服を箆筥に入れ、ゴミ箱も空っぽにして、テーブルにはクロスを掛けた。花は玄関の脇の南天をつんで一輪ざしに飾る。お正月らしい。

グラスとお皿と割り箸と用意していると、ピンポンと玄関のベルが鳴る。

「はい。すぐに開けるわ」

ドアを開けると、そこには八人。えーっ。どうしたの。みんな。

「お誕生日おめでとう。優に聞いた。急だからこれだけ」

「これだけって、みんなありがとう」

みんなそれぞれ家のおせちから取ってきたり、コンビニで買った

りしてすごい御馳走が並んだ。

「じゃ、今日はなつみの十五歳を祝って、ジュースで乾杯しよう」

「ありがとう。こんなの初めて」

と言いながら泣けてきちゃった。

「何泣いてるんだよ。じゃ、誕生日おめでとう！ カンパニー」

「カンパニー」

みんなの温かいハートに思い切り触れて最高のバースデーだわ。

第二章

何が嬉しいかって、サムこと、作務衣さむえじん仁がいること。名前すら珍しいのに、これまた眉目秀麗なうえに、学校で一番の優れ者。しかもスポーツ万能と来ていて、女子がほっとくわけがない。その彼が来てくれた。

「ねえ、優ちゃん、サムはどうして呼んだの」

「えっ、あいつにメールしたら二つ返事で行く行くって」

「本当。すごい」

「おい、目がハートになってるぞ」

「うふ、分かる？」

「えっちゃん！ 四日からの補習行く？」

谷村悦子は私と同じ聖蘭受験。文系なら任してというほど、国語や歴史などなんでもござれ。

「行くよ。折角西先生が補習してやるっていうんだから」

「そうだね、西先生優しいもんね」

「優はどうする？」

尋ねたのはきくぞー。村井菊蔵ってまるで歌舞伎役者みたいな名前。優ちゃんと同じ陸上部だった。受験は私立の大学付属。受ければ大学までいけるって。いいなあ金持は。きくぞーは多分受かるだろう。家は代々お医者様。しかも有名な美容整形のお医者様。お兄さんはもう医大生。お母さんは料理研究家。みんなでそんなに稼がなくてもというほど裕福な家。

「行くつもり。だって、家にいても仕方ないだろう。塾の講座を申し込まなかったし」

「そうか、じゃ行こうかなー」

「いいわねー。きくぞーは」

羨ましそうに言ったのはヒロリン。広末に似ていてうちのクラス

のアイドル。目がパツチリでスタイルもよし。俄然きくぞーの目もキラリン。広松美玖って、みくちゃんって呼ぶ人もいるけど、本人は後輩がつけたヒロリンがお気に入り。ヒロリンは聞くところによると優ちゃんのことが好きみたい。

ゲンちゃんは食べてばかりなんで、まっちゃんが食べすぎて怒ってる。その隣で一所懸命小皿に取り分けてるのが人のいい高橋洋。男なのに気が付きすぎてオカマといじめられることもあった。だが、洋曰く

「僕はれっきとした女好き」

「そうなんだー」

とこのメンバーはそんなこと気にもせず仲良く付き合っている。

「ほら、取り分けたから食べてみて」

きれいに盛られた唐揚げとサラダ。こういうことは洋に任せておけば完全に九等分してくれる。

「おいしいね、これは誰のところ？」

「僕のおばあちゃんの手作り」

「洋の家はおばあちゃんが台所全部やってるんだって」

「ええーっ、おいくっ？」

「六十五歳。でも若いもん。スマップのファンクラブにも入ってるし」

「ほんとー？ 話合うかも」

「うん、親の方が古臭くて封建的」

「そうかあ、そういう人が家にいるといいねえ」

楽しいパーティーは話で盛り上がり、ゲンちゃんのギター弾き語りにもっちゃんはどうとりするし、もうあっという間に時間が過ぎていく。

「お開きにするぞ。みんなで片付けよう」

洋が腕をまくって、

「さっさと運んで。一気に洗うから」

「洗剤つけまーす」

「洗いまーす」

「拭きまーす」

みんなそれぞれ運んで、最後に私が片付ける。すばらしい。あつという間に片付いた。

もうすでにどっぷりくれてるけど、満足な誕生日だった。みんなが帰るときに、まっちゃんが

「これ、みんなで出し合った。よかったら使って」

「なあに」

「開けてみて」

中から出てきたのは、可愛い手袋とニット帽。大きなポンポンが付いていて半端じゃない可愛らしさ。

「ありがとうー。うれしい。みんな本当にありがとう。大事に使うね」

「ちよっとつけてみろよ」

「うん」

手袋はジャガード織の雪の結晶模様。ニット帽もおそろいの柄。

「でもお店開いてなかったでしょう」

「それは任せて。お姉ちゃんの勤め先がブティック。今日も福袋詰めてるの。そこで可愛いのを見せてもらったの」

「わあ、すごいね。まっちゃん」

「この仲間に怖いものなしだな」

みんなの温かさがさらにホットな気持ちにさせてくれる。帽子をかぶって手袋をして、みんなが帰った後もしばらくそのまましていると、玄関を開ける音。

「おう、お誕生日おめでとう」

「あら、パパお帰り。早かったね」

「娘の誕生日だからねえ。切り上げて帰って来たよ」

「ありがとう」

手にはデコレーションケーキ。パパはいつまでも子供と想っているのね。それでも嬉しい。今日の一日の様子を話すと

「お前は恵まれてるなあ。いい仲間がたくさんいて」

「私もそう思う。優ちゃんが発起人よ」

「あいつはいい奴だ。嫁にもらってもらえ」

「それは別。理想は高く！」

「そうか、いずれわかるさ、どんな人がいいか」

パパの言わんとすることは分かってる。でも、今は恋したいの。

第三章

はい、始まりました。ここは地獄の一丁目。違う違う三年生の教室前。

「寒いねえ、朝から勉強なんていやだー」

ゲンちゃんが悲鳴をあげている。でも、この苦しみの向こうに明るい高校生活が待っていると思うと、頑張れる気がしてくる。

「ねえねえ、今日のお弁当なあに？」

って声をかけてくるのは優ちゃん。

「どうして、そんなことを聞くの？」

「実は腹が減ってー」

「食べてないの？」

「うん、お袋とけんかしていらないうって飛び出した」

それを聞いたゲンちゃんは

「食べてからけんかしろよ」

「そううまくいかないの」

可哀そうだから、おにぎり一つ上げることにする。あと二個あるし。

「はい、一個だけよ」

「サンキュー。恩に着るよ。俺が社長になった暁には…」

「ハイハイ」

どうでもいいけど、早く食べてくれないと先生来ちゃうよ。

ガラって後ろの戸が開いた。西先生だ。

「誰だい、ここで朝食食べてるのは」

「ふひまへん」

みんなあわてて席に着く。

「今日は今までの入試問題を抜粋してきたから、それをやるぞ」

「どこの問題ですか？」

「聖蘭だ」

「わーい」

「先生、聖蘭じゃ、僕たち関係ないじゃん」

「あほ、どこも似たようなもんだ。黙って解け」

だから、女子に好かれる西先生。ゲンちゃんはぶつぶつ怒ってるけど、洋は目がキラリン。行く気が満々に見えるけど。それってどう。

辛い補習も終わっていいよお昼。みんなで日向の席に移動して食べる。優ちゃんとゲンちゃんは弁当を買いに走ってる。私はまっちゃんを呼んで一緒にご飯。きくぞーは相変わらず豪華で美味しそうな弁当。みんなで一斉につまむ。

「おい、俺の分も残せよ」

「いいじゃん、いっつも食べてるんでしょ」

「そういう問題じゃないだろう」

ヒロリンはサンドイッチを作って来たっていうんで、男子が喜んで頂戴頂戴ってうるさい。それにしても、弁当買いに行ったゲンちゃんたちが遅い。

「おーい、大変だ。作務衣が合格一号だぜ」

「うっそー」

「本当！ 今貼り出してるの見た」

「どこどこ」

「W高校。もう推薦で決まり」

「いいなあ。あそこなら大学まで一直線だね」

羨ましい話だ。しかも、今日からスキーだって。もう決まった人は遊べるのね。

「これから、校長室の前にずーっと名前が出るんでしょう。張られなかったら惨めね」

「そうよね、最後だったら哀しい」

それにしても、こんなにキャーキャー騒いでるそばで、えっちゃ

んが本読んでる。すごい読書家。家だと勉強してないと言われるからって、学校での休み時間は全て読書。

「えっちゃん、聞いた？」

頷くえっちゃん。読みながら紙の束を渡してくる。

「私が書いた小説。読んだら一言書いて。必ず回覧よ」

「おい、またかよ」

「そう、またよ」

えっちゃんは小説家志望。私たちは彼女の推理小説を毎回読まされている。優ちゃんたちはコメディイにしてくれっていうけど、推理小説一本でいくそうだ。

「今度はどんなの？」

「まあいいから読んで」

ゲンちゃんは毎回終わりだけ読んでるみたいで、えっちゃんはゲンちゃんの感想はあまり重要視してないみたい。私は推理小説大好きで、彼女の作品にはいつも丁寧に感想を書く。すると、えっちゃんはんは

『なつみさんへ 谷村悦子』って書いた色紙を持ってきた。そうか、もう小説家の気分なのね。いずれ有名な作家になったら値段が上がるわね。そう思って部屋に飾ってる。

優ちゃんは結構読んでるみたいだけど、評価が厳しい。ときどき赤鉛筆で校正するから、彼女は清書の前には必ず彼に見せてるみたい。これは意外。優ちゃんって学校で読んでるとこは見たことないのに。えっちゃんは次回の新聞の文芸コーナーに出すって張り切ってる。

「新聞って学校の？」

「違うわよ。大手の新聞」

「本当に小説家みたいね」

「出すだけなら誰でもできるわよ」

そう言っても書けない私よりはすごいって思っちゃう。洋はパラパラとめくって、

「あつ、もう犯人わかった」

「言わないの！ あなたってデリカシーがないわねえ」

「フン。だってすぐ分かるぜ」

えっちゃんは犯人はすぐ分かるようになってるという。そこから物語は始まるんだって。この二人はなぜかウマが合わない。えっちゃんのすることに絡むのはいつものこと。他の人にはそんなことしないのに、洋はえっちゃんの天敵だ。でも、彼女だけに絡むのはひよっとすると好きなかなとも思っちゃう。

やっと終わった補習の帰り道、まっちゃんから誕生日の写真をもらった。

「いいね、まっちゃんの着物姿」

「そう、ありがと」

「8人も来てくれて感激したー。うれしかった。ありがとう」

「よかったね。いつも誕生日がお正月だからみんなで集まれなくて」

「本当、誕生日と正月が同じってめでたくないわ」

「中学最後に集まれてよかったよね」

いろんな写真の中に作務衣の写真が光ってみえる。

「よく撮れてるでしよう」

「サンキュー。かっこいいわあ」

「私の腕ってすごいでしょう」

思わずまっちゃんに抱きついたわ。こんな彼一人が映ってるのは初めて。大事にしようっと。

第四章

今日は補習が終わると、えっちゃんと聖蘭へ下見に行く。そう、受験会場の下見。ここの制服は紺のブレザーで、緑と赤のチェックのひだスカート、赤のリボンタイ。どうしてこんなに可愛いのか。入口に飾ってある制服は業者のもの。早くこれが着たい。

全部で四万六千円。はあ、替えのスカートを買ったら全てで六万円。いい値段だ。さらに冬のコートは二万円。これに靴と鞆、もう『パパ、すみません』と感じ。

それでも着たいこの制服。えっちゃんも目がきらきら。この学校の一年生と一緒に回ってくれる。みんな優しく、どうしても入りたいって気持ちになる。でも、えっちゃんは何か書いている。

「何書いてるの？」

「今度の殺人現場、学校なの。ここがぴったり」

「やだー、止めてよ」

「いいじゃないの。高校が舞台なんだもん」

これだから作家は嫌よ。夢がいっぱいの高校にそのイメージはよくない。それでも、創立百年を超えるこの学校は、ギシギシと階段の音もして、殺人事件が起きるには雰囲気がいすぎて気もする。各学年四クラス、女子大も併設してるから大学もそのまま行ける。やっぱここがいい。

二人でぐるっと回っていると、超きれいな青年がいる。

「ちょっと、すごいねえ。誰だろう」

その声を聞いて、この学校の先輩が

「あの方は先生よ。今年入られた体育の江田秋月先生」

「すごいお名前ですね」

「そうね、もうみんなの憧れの的よ。ちなみにクラブはバスケットボール」

「入りたーい。運動苦手だから、マネージャーになりたーい」

と、えっちゃんと声をそろえて思わず言ってしまった。その声に氣付いた先生が

「やあ、こんにちわ。受験生ですか。是非この学校に来て一緒に勉強しましょう」

と、声まで素敵。えっちゃんがすぐに自己紹介。

「私、谷村悦子です」

「私は秋野なつみです」

「いやあ、よろしく。僕は江田秋月です」

俄然、勉強する氣になったのは言うまでもない。パパが帰ってきても私は氣付かないくらい勉強していた。ノックの音がして、

「はい」

「どうしたんだ。そんなに勉強して。0点でもとったか」

「違う！ 受験勉強なの」

「ほう！ すごいな。学校見学すると力が入るんだな」

「そうよ。パパ、今日は手巻きずしよ」

「いいねえ。お前が用意したのか」

「うん、すし酢あるし、ネタはスーパーで買ってきた」

「明日、ママも帰ってくるって」

「よかったね」

パパはにこにこしてる。熱いわね。でも、こんな氣のいい娘って滅多にいないわよ。だって、いずれ私は家を出るし、パパの世話をしてくれる人がいるのはいいことだもの。

すると、メールが来た。

「今、下にいる」

えっ、優ちゃんどうしたんだらう。玄関の外にいた彼の顔は腫れている。

「どうしたの。腫れてるよ。ぶたれたの？」

「うん」

「誰、相手は」

優ちゃんはこの間からお母さんとけんかしたりするから、何かあると思ってた。今日の相手はお父さん。お父さんの勤務先が倒産して、高校へ行かないって優ちゃんが言うからそれで殴られたらしい。「高校へ行かなくても働けるって言ったら、この通り」

「そんなことあったの」

「うん、この前から危ないって聞いてたけど。正月から酔っ払ってたのはそのためさ」

会社がつぶれても。息子の高校ぐらいいは大丈夫っていうのに、優ちゃんは制服だけでも数万掛かるから定時制でいいっていうと親を見くびるなっていわれて喧嘩になったらしい。

「俺は無理してまで行くほど勉強は好きじゃないし。でも、親は自分が大学まで行ってるのに子供には行かせられないなんて言えないって」

「じゃ、奨学金でも申請するの？」

「それはするつもり。お袋が早くから学校と相談していたらしい。俺に黙って。何で黙ってやるんだって、この前はそれで喧嘩したんだ。俺のこといつまでもガキ扱いだから腹立って」

「心配掛けたくなかったんでしょね」

「そんな段階じゃないのにな」

制服が可愛いなんてばかげたこと言って下見に行った自分が、何だかとっても恥ずかしい気がした。

「なつみ、寒いから優ちゃんに入ってもらえ」

「そうね。優ちゃん入って」

優ちゃんは顔が腫れてるからもしもじしてたけど、とにかく居間が上がってもらった。パパはその顔を見て喧嘩かと心配したけど、「わかるなあ。お父さんの気持ち。僕が優ちゃんの親でもそうするよ、きつと」

「そんなあ、殴るの？」

私は思わずほおを触った。

「ああ、それぐらいするよ。優ちゃん、お父さんとお母さんの話をよく聞いてごらんよ。どうするのか、親の気持ちを立てて考えてやれよ。父親のプライドは今ズタズタなんだから」

「はい、それはそうだと思います」

パパは頷きながら、

「まあ、寿司でも食べて。なつみの作ったものはまあまあだから」

「そうよ、食べてから考えよう」

優ちゃんはにっこり笑って、

「ありがとうございます。でも、心配してるから帰ります」

私は優ちゃんが帰る後ろ姿を見て、彼が私よりずっと年上のようないな気がした。

第五章

新学期が始まったけど、もう卒業まであとわずか。

作務衣が来た。雪焼けしてる鼻が可愛い！　すると、彼の方から

「よっ！　おはよう。この前はごちそうさま。楽しかったね、誕生日」

「うん、ありがとう。今日もしてきたよ、あの手袋」

「あれ、可愛かったもんな」

「サンキュー」

こっちを見ながら、ゲンちゃんがまっちゃんとニタニタしてる。

「何よ。ニターっとして」

「いい雰囲気だね、お二人さん」

作務衣は平気な顔でニコニコ。どこまでも男らしいわ。でも、これって肯定してるってこと？

「作務衣はいいよな、お前はもう合格したから」

「まあね。でも、追いつかないと。向こうの学校は中学で高一まで済んでるから、もう補習が始まるんだって。今月末から」

「えっ、入学前に？」

「うん」

「すごい」

「お勉強が大変そう」

ゲンちゃんはそんなとこ絶対嫌だって。私も。優ちゃんがまだ来ないと思った瞬間、来た。

「あれれ、優ちゃん、髪が…」

みんなが指さして笑ってる。そう、マルガリータ。

「このくそ寒い時になんでその頭なんだー」

「けっ、うるさいわ。この髪形にしたかったの、前から」
後ろから洋が抱きついてきた。

「いいよいいよ。このマルガリータ」

「よせよ、その手を退けろ」

もう洋はぐりぐりとその頭をなでまくる。ほおずりする勢いがある。ちよつとー。

「でも、なんでなの？」

「うん、気持ちをすっきりさせるには外側から」

何だか吹っ切れたようで、ニコツと笑った。話がうまくいったみたいだ。どうなったかは知らないけどいい話し合いができてよかった。

「インフルエンザ流行のため、放送で始業式を始めます」

放送が聞こえてみんな席に着いた。はあ、校長先生の話が長い。でも、今日は座って聴けるからよかったわ。いつもは寒い体育館で、長い話を聞くともうトイレに行きたくなっちゃうから。話も終わりに近くなったときに、校長先生が

「えー、ここで、表彰状が届いているので報告します。谷村悦子さんです。青春推理小説大賞に選ばれました」

「キヤー」

「すごい」

「やったねー」

校長先生の話の中で、これほど盛り上がった経験はない。みんな拍手するわ、駆け寄るわ、えっちゃんは泣き出した。

「静かに！ えーと、作品名は『校長の死体が消えた？』です。オッホン」

みんな笑いたいが笑えない。えっちゃんも喜んでいた顔がブルーになって来た。

「なんで、そんな題名にしたのよ」

「仕方ないじゃない。賞に入るなんて思っていないもん」

校長先生は

「谷村さん、あとで賞状を取りに来るように」

だって。えっちゃんは震えている。『行きたくない』とつぶやきな

がら。

「お願い、なつみ。一緒に行って」

「やだよだ」

「そんなこと言わないで」

「もうー、あんたねー、この借りは高いわよ」

「わかったから。クレープ奢る」

はあ、クレープよりダイヤぐらい貰わないと合わない感じ。校長先生の部屋なんて、三年間で一度も行ったことないのに。なんで死体なのよ！

ホームルームでも拍手喝采だったけど、休み時間に二人で震えながら校長室へ行く。

ノックする。

「はい」

「三年の谷村悦子です」

「付添いの秋野なつみです」

「付添い？」

校長先生は笑いながらドアを開けてくれた。恐る恐る入ったら

「すごい題名だね。でも読ませてもらうからね」

「はい、どうもすみません」

校長先生は昔文芸クラブで、小説書いていたんだって。そんな話を教えてくれた。えっちゃんは校長先生から賞状を受け取り、校長室を後にした。えっちゃんは

「もっと前から校長先生と話しておけばよかったなあ。こんなに趣味が合うなんて。卒業近くで分かるなんて、つままないなあ」

「そうだねえ。話すと楽しい先生だね。私たちって簡単に判断しすぎね」

「うん、反省する。校長先生ってつままない人みたいに思ってた。だって、式の時の話っていつも面白くないもん」

私たちは何だかすごく申し訳ない気がして、シュンとして教室に戻ったものだから、みんなは叱られたのかって心配してくれた。で

も、校長先生の話を聞かせると、ため息まじりでゲンちゃんが

「そうだよなあ。卒業が近いと分かってくるよなあ。先生のいいところ。俺も部活の伊丹先生が最後の部活の日にみんなよくがんばったなって言ってくれたら、思わず泣けちゃったもん」

「うん、そうだねー」

その日はみんなとっても御利口さんになって、授業も真剣に受けた。西先生が

「どうした。インフルエンザか？」

って心配してくれたほどみんな静かだった。中学校を卒業するのがもっと先だったらと思った。優ちゃんはマルガリータが寒いのか、本当にくしゃみの連続でついに鼻水まで垂らしてる。洋が駅前で貰ったティッシュを渡してる。ピンクのえげつない程の写真入り。でもそれじゃ足りないほど、ズルズルいってる。優ちゃん大丈夫？

第六章

あの後ろ姿は、江田秋月先生じゃありませんこと！

駅の改札口で佇むすっきりとした立ち姿。えっちゃんと二人で顔を見合わせる。追いつこうとしたその時に、彼のそばに近寄る一人の女性。

「誰だろうね」

「彼女じゃない？」

「なあんだ、がっかり」

「でも、いい歳に見えるよ」

「そうかなあ」

「うん、きっと生徒のお母さんだったりして」

「わあ、いけない雰囲気。あんた小説のネタにしようと思ってるでしょう」

「うふ、わかる？ 実際にこういう不倫の現場見たことないから、興奮するわ」

「不倫かどうか分かんないでしょう」

「きつとそうよ。女の直感」

「ねえ、どうする？」

「勿論、尾行よ」

楽しそうだけど何だか怖いなあ。もしバレたら、合格も霧の彼方の行くんじゃないかしら。そう言ってももうえっちゃんは追いかけ始めた。

「待ってよ」

あわてて追いかける。今日はパパも遅いし、八時まではいいけど。この向こうは確かホテル街。やっぱり行くのかしら。えっちゃんは鼻息荒く書く気満々。

「見て、人影が無くなったら腕を組み始めた」

「すごい、そういうことかしら」

「なるほど、人前ではべたべたしないのね。というよりできないのよ。やっぱり不倫よ。決定」

ちよつと、えっちゃん機関車ぐらい鼻息が荒くなってるってば！
その中でも比較的きれいなラブホテルに二人の影が消えた。えっちゃんたら、ケータイで写メとってる。怖いったら。

「いいの？」

「いいのよ」

ここで何時間も待つわけにもいかないし、私たちは取りあえず帰ることに。二人で盛り上がって、異常な興奮状態になったのはいうまでもない。

家に帰ると、あら、電気がついてる。

「ただいまー。ママなの？」

「お帰りなさい。ごめんね。誕生日もできなくて」

「いいのよ。友達がたくさん来てくれて楽しく過ごしたから。体は大丈夫？」

「うん、もう安定期に入ったから。動くのよ、赤ちゃん」

「うっそー、触らせて」

ママのお腹はゴニョゴニョ動いてる。神秘的だ。ニコニコしてるママはまだ三十二歳。ママっていうのが気の毒な感じだけど、パパのよく行く喫茶店の従業員だった人。ママの方が好きになったんだって。すごい意外なんだけど。きれいな人なのに、あのパパのどこがいいのって聞いたたら、何もかもって言ったときにはひっくり返るほど驚いたけど。よく気も遣ってくれて、私も大好き。

二階へあがると、優ちゃんからメール。

「学校は県外。実は親父の田舎へ引っ越す」

何ですって。そんなこと聞いてない！

「今から会えない？」

震えながらメールすると、優ちゃんは

「いいよ。今から行こうか？」

「うん、待ってる」

ママにすぐ報告すると、

「あなたの大事な人でしょ？ 大丈夫なの？ なっちゃん」

「大事な…そう、大事な人」

そうだよ、恋人や彼氏ではないけど、大事な人。何で県外まで行っちゃうことになったの。髪を切ったのはそんなこともあったからなのね。

「こんにちわー」

「優ちゃん、上がって頂戴」

部屋に入って来た優ちゃんは、寒そうな頭をニット帽で覆ってる。

「寒いよー」

「何で言ってくれなかったの」

「言ったじゃん、今。まだ誰にも言っていない」

「何処へ行くの？」

「高知」

「高知って四国の？」

「他にどこにあるんだよ」

「何でそんな遠くに？」

「しょうがないじゃん、親父の会社も潰れたし、家のローン払えないし。もう妹なんか泣きっぱなし」

そうか、妹はまだ小学生。気持ち分かる。私も泣きたい。

「まあ、それでも田舎には家もあるし、畑もあるから。おじいちゃんも喜んでる」

「そうなんだー。学校は？」

「うん、昼間の高校へ行くつもり。こちらの奨学金も申し込んだけど住居費が高すぎて、結局田舎へ行こうということになって」

優ちゃんの寂しい気持ちも分かるし、ただ黙って話を聞くしかない。ママが紅茶とクッキーを持ってきた。

「引越すんですって。寂しくなるわ」

「おばさんも元気な赤ちゃん産んでください」

「ありがとう。なっちゃんが泣きそうよ。ほら」

気がつかないうちに泣いていた。ママと優ちゃんのやり取りをもう見れない気がしてたから。困った顔で優ちゃんは寂しそうに笑った。ママは静かに降りて行った。

「まあ、世界の果てじゃないんだから」

「そうよね。ゲンちゃんも泣くわね」

「うん、これから行く」

「いつ行くの？」

「来月の十四日」

「バレンタインデーに？」

「そうだね。なんなら先に受付するよ」

「ふん、義理チョコは当日でもいいでしょう」

思わずすねてしまう。ああ、どうしてこう憎まれ口が出るかなあ。

「じゃ、帰るから」

そう言って優ちゃんはゲンちゃんのところへ行った。ケータイが鳴る。えっちゃんだ。もう、江田秋月なんかどうでもいい。でも一応気になる。ケータイ開くと

「私の探偵網によると、さっきの女の人、先生だよ」

「えーっ、先生なの？」

「どこの？」

「私のお姉ちゃんの学校」

「どこだっけ」

「S高校」

「あの秀才で有名なところ？　すごい。科目は？」

「数学の鬼先生。お姉ちゃんにケータイ見せたら大騒ぎよ。知ってる知ってるって」

「でも、結婚してるの？」

「そんなこと分かんない。お姉ちゃんが明日調べるって」

なんかとっても広がりがありそう。えっちゃん、大丈夫かな。

第七章

優ちゃんの引越しニュースはみんなに広まることとなり、もう大騒ぎ。これほど人気があったのかと改めて思う。ゲンちゃんは目が腫れるほど泣いたらしく、今日は泣きすぎて頭が痛いって。まっちゃんは隣のクラスにも広めていた。

「入試が終わったらみんなでお別れやろうよ。でも、卒業前だぜ。何でだって聞いたたら、荷物だけとかく送らないと、ローンがそれだけかかるからって」

「はあ、不況のとばっちりは俺たちにも確実に来るんだなあ」

洋はため息をついてる。作務衣はカレンダーを持ってきていつにするか、アンケート調査。私は毎日してほしいくらいよ。1日だけでは足りないわ。そんな中、えっちゃんにやけて登場。

「何でこんなときにニヤニヤしてるんだよ」

ゲンちゃんが突っ込むけど、えっちゃんは秋月のことが分かって来たみたい。私を連れ出し、

「あのね、彼女は独身じゃない。れっきとした奥様。しかも、旦那様は海外赴任」

「えーっ、じゃ、不倫ね」

「そうよ、どうする」

「どうもしないわよ。脅迫しても捕まるのは私たちよ」

「そうね、でもこういうことがこんなに身近に起きるなんて、もう高校生活楽しみ！」

「それ方向性が間違ってるわよ。そんなことより、来て」

えっちゃんは優ちゃんのことを知らないから、しっかり教えてあげる。すると、先程までのニヤニヤがふにゃふにゃになっちゃって。ぼろぼろ涙がこぼれてる。

「どうして、何時わかったの？」

「昨日、優ちゃんが来て」

「ショック！ あんない奴がいなくなるなんて」

「それで、お別れパーティーをいつするかって」

場所はきくぞーの家。広くてきれいで、料理も出してくれるって。ただし、材料費は負担。もちろん言うことなし。優ちゃんが向こうの学校の試験は十日だっていうから、十三日にしようということになった。この日は土曜日でお休みだから。はあ、もう2週間しかない。

いよいよ私とえっちゃんの入試の日。ママは風邪ひくといけなから、家でお留守番。パパは仕事。えっちゃんと私は手を握り合って聖蘭へ。

「おはようございます」

元気に迎えてくれる諸先輩。その横にいるのは江田秋月。えっちゃんスタスタと近寄って

「おはようございます。江田先生」

「おう、君たちはこの前来たね」

「はい、よろしく願います」

その度胸の良さに驚くわ。えっちゃんは試験会場でもメモしてる。

「あんたねー、テストなのよ。今日は入試なの。いいの？」

「私はもう平気。なつみはここにきてまだ勉強するの？」

「もちろん、最後に見たところがテストに出てるってよく言うじゃない」

「そんなことないわよ。それより、秋月っていいねえ」

「だから、もてるんでしょう。でも危ないわよ、毒牙にやられたらどうしよう」

「ふふふ、作品の上ではどうかな」

「あなた、書く気なの？ やめときなさいよ」

「だって、ここの話って分かんないわよ。高校生が書く官能推理小説ってどう？」

「ばっかじゃないの。想像だけで書けるわけないじゃん。早く行くわよ、教室に」

メモするえっちゃんの襟を持って教室へ。もう、緊張感で胸の鼓動がすごい。いいわねえ、鈍感なえっちゃんは。

全てが終わった。いろいろ気になるところはあるけど、それほど難しくなかった。

「どうだった？」

「まあまあかな」

えっちゃん是可以るからいいけど、私はどうかな。まあ、やるだけやったし。後は発表待つのみ。

この間のクレープ奢ってくれるっていうから、二人で店に直行。いいにおい。

「あのね、秋月先生と鬼先生の関係はともかく、姉情報だと鬼先生は子供がいなくて大きな家に一人きりらしいよ」

「ふーん、夫婦仲はどうなのかなあ」

「それが、問題よね。でも、本当に取材がこんなに楽しいものだなんて」

「それは違うんじゃないの？」

熱々のクレープをほおばりながら、噂話に花を咲かせる中学生。もうおばさんみたい。それより、優ちゃんに贈るプレゼントを頼まれているから見に行くことにした。

「メモはもうおしまい！」

えっちゃんは構想がどんどん湧いてるようで、しきりとメモするから恥ずかしい。

その夜、ママは入試が終わったからって、ごちそうを作ってくれた。私の大好きな和風ハンバーグと豚汁と、フルーツサラダ。さらに唐揚げまで。もう食べきれない。パパは帰ってきて

「すごいなあ、これで合格したら何が出るんだい」

「それはもうでっかいサーロインステーキよ」

とにかくみんなで乾杯。私はお子様シャンパン。パパはビール、ママはウーロン茶。もうみんなバラバラだけど最高。すると、そこへ優ちゃんのお母さんがやって来た。

「すみません、美紀が来てませんか。どこにもいなくて」

「どうしたんですか、まだ帰ってないの？　もう七時ね」

美紀ちゃんは引越すのが嫌で、この間から泣いてるって話は聞いたけど。取りあえず手分けして探すことにした。ママは電話番号で残って、パパと二人で。もう学校にも連絡して大騒ぎになってるらしい。優ちゃんは友達の家や学校周辺。お父さんは残務整理で帰ってこれないらしい。お母さんは心配して目が真っ赤。まだ二年生なのだ。七歳も離れてるからみんなに可愛がられてるミミちゃん。

何処に行ったんだろう。

第八章

優ちゃんが学校にもう一度行ってみると、体育倉庫の裏にミミちゃんがいいた。子犬を連れて。

「何でこんなところにいるんだ」

「だって、友達と子犬を飼っていたんだけど、引越すと友達はマシヨンだし引き取れないっていうから……ふえーん」

つまり、子犬を連れて帰る場所がなくなったというわけだ。今までは公園の裏に置いていて帰りに寄っていたらしい。でも、友達も一人では世話ができないし、ミミちゃんが引きとるつもりが引越すことになって誰にも言えなくなってしまったというのだ。よく泣いたのはこのためらしい。

見つかったという知らせを受けて、みんなが学校に集まって来た。お母さんは心配しすぎて、見た途端に泣いていた。優ちゃんは困ったように見ていたが、その手はミミちゃんをつないでいて、優しいお兄ちゃんというのが分かる。

みんな喜んでいたが、問題は子犬。優ちゃんは

「お母さん、親父が車を持っていくときにこの犬も連れて行っているかな。トラックには載せられないし」

「そうねえ、田舎の家は広いでしょう。おじいちゃんにも話してみるわ。美紀が世話をする約束よ」

「本当？ 飼っていいの？」

優ちゃんはミミちゃんの手からその子犬を抱きあげると

「お前は責任あるぞ、姫のご機嫌をとらないと餌はもらえないぞ」
きゅーんと鳴く、まだ生まれて一カ月ぐらいの子犬。ミミちゃんは大喜びだ。みんなはほっとすると、途端にお腹がすいてきた。

「ねえ、うちに来ない？ 入試が済んだから御馳走があるの」
「そんな悪いよ」

でも、ミミちゃんの目はきらきら。パパも

「是非どうぞ。こんなことはありませんから。さあ遠慮しないで」
お母さんは皆さんにお礼を言ったり、お父さんのご飯も作らない
といけないからって、子供だけが家に来ることになった。ママはに
こにこして

「食べきれないぐらい作ったからよかったわ。さあ、食べて。寒か
ったでしょう」

暖かい部屋に暖かい料理。このメンバーで食べることは最初で最
後かもしれない。そう思うと、来てくれてよかったなあとつくづく
思った。

子犬は段ボールの中でスヤスヤ眠っている。かわいいなあ。

子供たちはミミちゃんに合わせてババ抜きのレストラン遊び。ミミ
ちゃんは子犬を飼ってもらえることですっかりご機嫌になっている。
疲れて眠そうなミミちゃんを連れて優ちゃんは帰ることにした。

「おい、寝ちゃだめだ。犬も連れてるんだからおんぶはできないぞ」
「それなら、犬は私が抱っこして優ちゃんがミミちゃんをおんぶし
たら」

「いいよ、悪いよ寒いし」

「平気よ」

「じゃ、帰ったら親父に送ってもらおう。夜は危ないから」

膝掛けをミミちゃんに掛けて、おんぶする優ちゃん。私は子犬を
ジャンパーの中に抱えて出かけることにした。

星降るような夜に、優ちゃんと歩くいつもの道はとても静かで二
人の声しか聞こえない。ミミちゃんは寝息を立てて眠っている。疲
れ切ったのだろう。

「優ちゃん、みんなでお別れパーティー計画してるのよ」

「うん、聞いた。ありがとな。十三日だって？ 前日だな」

「そう、みんなできくぞーの家で集まろうって」

「俺が主役だな。でもつまんないな。お別れって」

「そうだね。寂しくなっちゃうな。けんか相手もいなくなるし」

子犬の暖かさが心地いい。優ちゃんはミミちゃんをよいしょと抱えながら、

「なあ、お互いが高校に入っているんな友達ができて、ときどき会おうな。まあ、遠いから無理かもしれないけど」

「うん、夏休みとか冬休みにね」

「俺もバイトもするつもりだし、旅費を作るさ。夜行バスで来るぐらいの金はあるさ」

「そうだね。私もいくかもしれないよ」

二人で話していても段々テンションが下がってくる。優ちゃんの家に着くと、その半端じゃない段ボールの数に驚いた。

「すごいねえ、引越して」

「ああ、もうどんどん捨ててるよ、大事なものもあるんじゃないかと思うぐらい」

優ちゃんのお母さんは

「まあ、ご迷惑かけてごめんなさいね」

と、謝りながら部屋の段ボールを押しつけながら座布団を出してくれた。ミミちゃんを部屋で寝かせた優ちゃんは、

「親父がもうすぐ帰ってくるから、俺の部屋においでよ。いっぱいだけど」

二階の優ちゃんの部屋も随分と変わっていた。ゴミ袋に小さな鉛筆立てがあった。確か小学校の卒業制作で作ったものだ。

「捨てちゃうの？」

「ああ、もう古くなったし、なるべく持っていく物を減らさないといけないから」

「私に頂戴、これ素敵だもん。優ちゃんは彫刻刀がうまいから前か
らねらってたの」

「なんだ、じゃもつと前に聞いてたら新品の時にあげたのに」

「ううん、このぐらいがちょうどいい」

鉛筆立てには四面とも唐草模様が彫られていて、濃いブラウンがとても素敵だった。みんなはカラフルに塗ったのに、優ちゃんのは

大人っぽい仕上がりでとても小学生とは思えなかった。

「大切に使うわ。ありがとう」

「ゴミ袋から渡すなんて、申し訳ないなあ。ちょっと待って、おまけにこれも」

それは駅伝で貰った銅メダルだ。持っていく方の箱から取り出して首に掛けてくれた。

「いいの？ 大切なものじゃないの」

「うん、いいよ。なつみが持っていてくれたら」

その声を消すように、下から

「おーい、帰って来たぞ。なっちゃん送るよ」

「あーあ、親父って空気読めねえな」

と笑いながらつぶやくから、わたしも吹き出しちゃった。

優ちゃん、ひよっとしてキスしようとした？

第九章

みんなが心配していた合格発表の日、私とえっちゃんは聖蘭へ向かった。

玄関前の掲示板に貼り出される予定。ドキドキしながらまつこと十分。

聖蘭の秋月先生が持ってきた！

「なんかもう死にそう！」

「なつみはもう大げさな」

というえっちゃんも震えてるのは分かる。声が裏返ってるもん。一二八と一二九の連番だ。片目をつぶりながらも、前へと進む。

「ある？」

と私。

「ない」

とえっちゃん。

「えーっ」

「うっそピヨーン」

あるじゃありませんか。連番で。やったーと大騒ぎ。抱き合う私たちを秋月先生が見つけた。

「おめでとう。よかったねえ」

「ありがとうございます。これからよろしく願います」

「ようし、びしびししごいてやるから。バスケットだな」

「いえ、それはちょっと…」

「なんだよ、いいぞ、バスケット。ちょうどマネージャーも卒業だし、頼むよ」

えっちゃんは、すかさず

「わかりました。やります」

「よし、一人確保だな。君は？」

「私は、あの、新聞部に」

「そうか、それもありだな」

でも、えっちゃんの方が絶対向いてるけど。これ以上探偵は無理。怖いもん。えっちゃんは取材するつもりでいるみたい。なんか力が入ってるもん。ほら、もうメモしてる。秋月先生は絶対勘違いしてるよ。えっちゃんは小説書くためのメモなんだから。

「記録して覚えるのが大事だ！」

あーあ、違うのにな。えっちゃんは真剣に先生のセリフをメモしてるのに。覗くと

『と、花月先生は力説しているが、気持ちは朝子のことしか考えていなかった』

もう知らないよ。えっちゃん。取材に余念のないえっちゃんを置いて電話をかける。ママが電話口で泣いている。

「よかったね。今日はみんなで食べに行こう！ パパは伊勢海老を御馳走するって言ってたわよ」

「本当！　うれしい！　二年ぶりよ。ママの結婚式以来だから」

「よかったわー。私も御馳走が食べれるなんて。なっちゃん、ありがとう」

次に優ちゃん。

「受かった！」

「ヤッホー。おめでとう。お前遅いよ、待ちくたびれたぞ。えっちゃんは？」

「もちろん、一緒よ」

「そうか、よかったなー。今日は家族でお祝いだろう」

「うん」

「後で、メールするよ」

「わかった」

私はケータイを切りながら思った。

『なんで優ちゃんに教えてるんだろう、私の好きな人って優ちゃんじゃなくて作務衣のはずでしょう？』

でも、作務衣と話したいと思わない自分がここにいる。それより、優ちゃんに知らせたかった。ヒロリンには悪いけど、やっぱり優ちゃんのことが好きみたい。パパにいわれてたけど、認めたくなかった。幼馴染ではドラマチックじゃないもん。

だけど引越しが決まり、あの鉛筆立てもらった日から、とっても意識してしまってる。優ちゃんはさりげないけど、私はもう毎日うがい薬と超音波の歯ブラシを欠かさない。だって、もう日がないんだもん。また、二人きりになる機会があったら。今度はきつと：キヤー、そんなこと：恥ずかしい：うれしい：かも。

すると、えっちゃんが後ろから

「はあ？　なんかにやけてるよ。怪しいー、誰に電話してるの？」

「ママとパパ」

「うっそー。違うねー、絶対！」

もうえっちゃんは鋭いから。危ない危ない。

「それで、秋月先生はどうなん？」

「あのね、お姉ちゃんに聞いたところによると、秋月先生は鬼先生のお隣に住んでたんだって。子供のころ」

「じゃ、ずーっと、憧れてた人なのかな？」

「うん、そうみたい。でも、何かありそうなのよね」

えっちゃん、気持ちが秋月先生に向いてない？　本当に小説のネタだけ？

家に帰ると、ママはパパに抱きかかえられてる。

「どうしたの？」

「ママがお腹が痛いって」

「えーっ、生まれるの？」

「いや、早すぎるよ」

「今から病院に連れていくから、夕飯は一人で何か食べておいてくれ」

ママは油汗をかいて

「なっちゃん、ごめん。折角のお祝いなのに」

「いいよ、そんなこと。パパ、私も行く」

「そうか、もう救急車が来るから」

まもなく、救急車がやって来た。初めてだ。こんな車に乗るなんて。車内はいろいろな器具がついている。テレビで見たように。でも、隊員は落ち着いていて総合病院に。ママの口に酸素吸入のマスクがつけられた。

ママはまだ六カ月に入っただけ。小さすぎるって。どうしよう。ケータイも何も持たずに飛び乗った私は、病院で先生の話聞くまでの不安な気持ちは言いようもなかった。パパの顔は青ざめているし、ママはもう声も出ない。どうしていいのか分からなかった。

先生は

「早産です。お子さんの命は助かるかどうか保障はできません。奥様を助けることに全力をかけます」

今、聞いていることは嘘よね、ドラマよ、きっと。助かるわ、赤ちゃんもママも。誰かそう言って。

パパは落ち着いた声で

「先生。子供は残念ですが、とにかく妻を助けてください」

心臓が止まりそうな会話だけど、私は祈るしかなかった。先生はママと分娩室に入って行った。パパは私の肩を抱いて

「大丈夫だ。心配するな」

って言うけど、そんなこと無理な話だった。怖くて涙が止まらない。ふと、廊下の奥から靴音が聞こえた。

優ちゃんだった。

エピローグ

優ちゃんは家に救急車が来たという話に驚いて、わざわざ来てくれたのだった。

「大丈夫？ おばさん」

パパは

「ああ、優ちゃん。心配掛けたね。どうもありがとう」

と、優ちゃんの手を取って握手していた。私は、そんな彼を見てものすごくほっとしている自分にびっくりしていた。急に安心してしまふほどの力が優ちゃん存在にある。

「夜遅いの、ごめんね」

「そんなこといいよ。どうなの？」

「うん、赤ちゃんは無理かもしれないって。とっても時期が早すぎるって」

「そうか。大変だね」

「うん。助かってほしい」

「大丈夫だよ、きっと」

優ちゃんは暖かい紅茶をお母さんが入れてくれたって、ポットを持ってきた。暖かい紅茶は美味しくて、生き返る様だった。暖かい気持ちうれしい。パパは飲みながら、話し出した。

「まだ、なつみが小さい時、ママは病気になってずっと病院に入ってたままだっただろう。そんな時、喫茶店でモーニングを食べたり、ランチを食べたりするから、宏美と知り合ったんだ。亡くなったときに黙ってお葬式にも来てくれて、その後の命日もずっと。宏美は結婚は望んでいなかった。でも、お前が賛成してくれたんで、パパは嬉しかったよ。なつみは宏美と仲良くしていたし、子供もできて喜んでたら、またこんなことが…。パパと一緒にいる人は不幸になって行くようで…つらいよ」

「パパ。大丈夫よ。ママは大丈夫。きっと助かるわ」

「おじさん、ぼくたち二人で天満宮にも行ったし、きっと祈りは通じると思います」

「ありがとう。そうだね。優ちゃん、君が引越すのは私もさびしいよ」

優ちゃん、本当に行かないでって言いたい。すると、分娩室の電気が消えた。

心臓が早鐘のように打っている。3人が思わず立ち上がると、先生が生が

「ぼっちゃんです。今管が繋がれていますが、保育器で生きてます。奥様も大丈夫です」

「本当ですか。ありがとうございます」

パパは涙がこぼれていたけど、体が折れるほど頭を下げていた。

私と優ちゃんは手を取り合ってたよかったって喜んだ。ママはまだ眠ったままだけど、今日は集中治療室に泊ることに。赤ちゃんはとっても小さくて、四五〇グラムだった。まだ内臓も出来上がった状態とは言えないので、三カ月は入院したままということになるらしい。先生は大事な話をしたいとおっしゃって、

「お子さんに障害が出ないと言い切れません。あまりにも小さいので網膜、肺、脳も異常が出るかもしれません。もちろん、私たちは全力を尽くします」

「分かってます。こんなに早いお産ですから。でも、妻は大丈夫ですか」

「ええ、奥様は明日になれば目を覚ますでしょう」

「逢えますか」

「ええ、こちらへどうぞ。お子さんも逢えますよ」

優ちゃんも一緒に白衣とマスクを着けて、ママのところへ。顔色はピンクになっていて、行く前の青い顔とは違っていた。赤ちゃんが無事生まれたことは知っているのかしら。パパは愛しそうに額をなでていた。

私と優ちゃんはその様子を見ながら、

「顔色が良くてよかったね」

って顔を見合わせて言った。次に新生児の治療室は、保育器の中にやせた小さな赤ちゃんが痛々しく管をつながれて眠っていた。本当に触ると壊れるんじゃないかと思うぐらい小さい。ときどき、ビクって動くから可愛くて思わず笑みがこぼれてきた。可愛い弟、お姉ちゃんが守ってあげるからね。手を入れると、小さな小さな手を触ることができた。ヘアピンぐらい細い指だけど、手を握ろうとするそぶりを見せる。

「可愛いねえ」

パパは早速名前を考えないとつぶやいていた。

パパを病室に置いて、私は優ちゃんと一緒にママの着替えや、入院の支度を取りに帰ることにした。

夜空に星が輝いて、弟の誕生を祝ってくれてる気になってくる。

「本当によかったわ。二人とも元気で」

「ああ、お前もついに一人っ子から解放されたね」

「ええ、可愛い弟が泣かされたら、飛んでいくわ。幼稚園も小学校も」

「怖いなあ。でも可愛いねえ、赤ちゃん。美紀もあんな可愛い時があったのに」

「そうねえ。子供って天使ね」

「ああ、羽が生えてる気がするよ」

二人はずーっと、このまま家まで歩いて帰ることにした。四キロもあるのに。

「優ちゃん、バレンタインのチョコレート大きいの作ってあげる」

「うん、でもチョコより欲しいものがある」

「なあに」

と顔をあげると、いきなり唇に軽くキス。

「ぼくはこれで十分です」

「ふふふ、優ちゃん、この前から狙ってたでしょ」

「ああ、でもバレンタインデーにも下さい。もう一回」
その声に、今度は私からキス。

「これ、前払い」

優ちゃんはヤッホーって吠えながら走りだす。私も追いかけて走る走る。

楽しいな高校生活。私たち遠くても平気。

えっちゃん、秋月先生より私たちを取材した方がいいかもよ。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4486j/>

バレンタイン・キッス！

2010年10月8日15時24分発行